

1 パッションリップといつでも挿乳パイズリデート

——駅前大通りの信号が変わると、ざわついていた人混みが一斉に動き出す。

その中に、少女と少年が寄り添うように紛れていて……。

「——マスター、凄いです……！ ……人がいっぱいです！」

「リップ、迷子にならないようにしないとね……」

きよろきよろと辺りを見回しながら、すぐ隣で聞こえる言葉に彼女は振り向く。

ふんわりと、雑踏の中で紫のロングヘアが揺れた。

……桜色のリボンと一緒に……。

「……わたし、そんなに子供じゃありません……！」

……彼女はわざとらしく、そして可愛らしくむくれてみせると、たぶん♡ たぶん♡ と揺れる、160cmの大きな胸を張る。

……けれど、そんな仕草が余計に内面の幼さを際立たせて。

「ごめんごめん、リップがあんまりにも夢中になって色々見てるから……」

——パッションリップ。

女神の神核を宿した、アルターエゴのハイ・サーヴァント。

あるいは、とある少女の愛憎から生まれたアバター。

ここは、月の聖杯戦争の裏でプログラムとして生まれた彼女が初めて降り立つ場所。

マスターの少年にとつては、よく知る国、よく知る街。けれどリップは、それをデータでしか知らない。

……すべてが新鮮に見えるのも、無理はなかった。

「……もう……そんなに言うなら……。わたしのこと……離さないでくださいね……？」

……リップは薄桃色の長袖ブラウスで指先までびたりと隠れた腕をおずおずと恥ずかしそうにマスターに差し出して。

……握って欲しい、とアピールしてみせる。

その袖にはびっしりとリボン状の魔術的なプログラムが巻き付いていて、単なる衣服ではない、と分かる。

……彼女の身体の中で最も異質な黄金の巨腕は、すっかり袖の中で圧縮されて、服越しに触れるだけでは、普通の少女の柔らかな細腕と何ら変わりはない。

「……い、いつもと違って……え……、バランス、取れないんですから……」

ただ繁華街に向かう横断歩道を渡るだけでも、今のリップにとっては危険がいつぱい。

……常にたぶたぶと揺れ動く重すぎる胸と、いつもよりはるかに軽い両腕に、戸惑いを隠せない。

乳房の北半球が　どゆん……つ　と大きく突き出すせいで、ただでさえ足元が一切見えていないのに。

……リボンのついたよそ行き用のパンプスで恐る恐る、一歩ずつ踏み出して。

まだ履きなれていないせいか、足取りは更に危なっかしい。

その変化は、リップ自身が腕や身体の異質さを自覚し、少しずつ少女らしくなっていくうちに、いつしか忘れて

しまったこと。

……怪物だったころは、一人でも歩けていたのに。

「……大丈夫、ちゃんと握ってるよ」

……けれど　マスターの手に　きゅっ、と袖口ごと腕を握り返される感触が、リップの頬を安堵で緩ませる。

……手を握ってもらう、という些細な触れあい。

少女としてのパッションリップが、ずっと求めていたもの。

それがたとえ不完全なものであっても、ほんの僅かなものであっても、叶うのならば嬉しかった。

今は、一人で歩けなくたっていい、そう思ってしまうくらいに。

……自分の手を取って、握ってくれる相手がいるのだから。

「……しっかりエスコートしてくださいね……」  
♥

……マスターの手のひらを感じるうちに、リップの色

白な頬はすっかり真っ赤になつて。

「……その……えつと……。一応、デート……なんですから——♡」

「うん、上手く出来るといいけど……」

……たくさんの店が立ち並ぶ街を、リップと二人で歩む。

ただそれだけなのに、いつもと全く違う距離感のせいで、緊張してしまう。

マスターの憂いを他所に、彼女は手を繋いだまま初めてみる華やかな光景に吸い寄せられていく。

「……見てくださいマスター、あの服可愛いです……!」

アパレルショップのショーウィンドウにリップが足を止めると、鏡には今の彼女の姿が映った。

「いいなあ……、私もああいうの、着てみたいな……」

ブラウスと柔らかなスカート、そしてブーツ。

デートのためにBBから用意された特製のファッション

ンでも、一度着替えることを覚えると、憧れは止められなくなる。

……子供扱いを嫌がって、こうして見た目だけは背伸びをして、大人に憧れてみせるけれど、リップの内面はまだまだ幼い少女でしかない。

……厚い前髪と天然の眉毛、垂れ目がちな大きな瞳と童顔が、その印象を更に強めて。

それは同時に庇護欲を誘う、小動物のような愛くるしさでもあつて。

(リップって……やっぱり可愛いよな……)

こうして普通の少女のように鏡に映ると、マスターもそれを改めて実感させられていく。

……けれど、首から下は違う。

せつかく繕われた特製の礼装ブラウスは、160cm・

4Zカップという規格外の超乳のせいで、内側からぱんぱんに張りつめて、時折 みちっ……♡ みちっ……

♡ と苦しげな音を鳴らす。

……大玉のスイカを横に二つ並べたような特大のボリ

ユーム、臍のラインどころか腰にまで届くほどの膨らみに、今にも負けそうになっている。

下着をつけていないせいで、二つの乳房の頂点では、さくらんぼサイズ乳首の影や形までもが、うつすらと浮き始めていた。

160cm、リップ自身の身長さえも超えてしまうほどの、アンバランスな胸囲。

まだ幼さの残る性徴期の少女の上半身を、暴力的にさえ感じられるほどの「おっぱい」が丸ごと覆い隠してしまっているのだから。

彼女が呼吸するだけで、一步を踏み出すだけで、無防備に たゆん♥ たゆん♥ と重たい乳肉が揺れて、男の邪な視線を誘って……。

……普段はまともな衣類を着られないほどに敏感な肌は、その度にぞわぞわと快楽にもいた刺激を身体に奔らせて。

そうして歩くうちにじわじわと染み出す汗とフェロモンが、リップの肉感的な身体をより蠱惑的に仕立てあげてみせる。

……どんなに可愛らしく振舞おうと、パッションリップという少女はその淫靡な身体を隠せない。

無自覚に、無作為に、男性を誘うフェロモンを振りま

いてしまう。

可憐な童顔と豊満な乳房が、互いを際立てあつて……。

……それも全て、定められたこと、

B Bによって生み出されたアルターエゴは、女性の身体の煽情的な部位をシンボライズされて生まれてきた。

ある者は脚を、ある者は瞳を……という具合に……。

……そしてパッションリップは、幼い身体に、豊満な乳房という格別のセックスアピールを与えられて……。

ただでさえ雄の本能を存分に煽る、極上のロリ爆乳少女。

アルターエゴとして彼女の根本を形作る求愛と愛憎が、それを更に倒錯的に変えていく。

サーヴァントとしての彼女が持つ、Aランクを超える被虐体質のスキル。

歴戦の英霊たちすら狂わせるほどの、精神汚染にも似た抗いがたい衝動を見る者に抱かせて……。

そうして煽りに煽られた欲求はもろろん、リップの蠱惑的な身体にも向けられてしまう……。

「……っ♡ うう……っ……♡」

……はつきり言ってしまうえば、もうマスターの理性は限界だった。

たとえそれが、初々しいデートの最中であろうとも。

ただ隣を歩くだけでも、たふたと揺れる乳肉やたわむ谷間を見せつけられて。

こうして背中越しに見ている時ですら、横乳や裏乳のポリウムを味わわされて。

ばつんばつんに張りつめたブラウスが、いつも以上に重さや大きさを際立たせる。

「可愛い」と胸をときめかせるうちはまだいい。

その身体に、少しでも「エロい」と本能を昂らせてしまえば、一気にスイッチが入ってしまう。

……触れたい。

撫でたい。

弄りたい。

揉みしだきたい。

挿入したい。

挟みたい

……犯したい……。

この胸を。この爆乳を。この谷間を。

今この瞬間に、思う存分犯してみたい……。

この少女の顔を、マゾ雌の快楽に歪めてやりたい……。

そんな欲求が止めどなく湧き上がって、邪な妄想で脳を満たして。

……股間では、ペニスを硬く膨らませていく。

英霊ですら抗えない衝動を、魔術師の端くれとはいえ、ただの人間が抑えられるはずがない。

……まして、雄としてもすっかり盛りを迎えた少年が、一度知ってしまったロリ超乳の味を我慢できるはずがないのだから。


ごくっ……、と生唾を飲むと、もう抑えることなど出来なくて……。


「り、リップ……、ちよつといい……？」

「……？」

マスターの震える声が、背後から聞こえた途端、バストとは不釣り合いに線の細い少女らしい肩が、本能のままに掴まれる。

……それだけでは済まない。

そのまま肩幅のラインをはみ出した横乳に指が触れた  
と思うと、そのまま背後から むにゅうう……っ  と  
力強く驚掴みにされてしまう。

「……きやう……ん……っ  」

片方で10kgを超える乳肉をまるごと捏ね回すように  
揉みしだいても、指先が爆乳に沈み込んで、溺れていく。

……マスターの両手をいっぱい広げても、リップの  
下乳すら満足に覆うことが出来ないのだから。

ぎゅうぎゅうと抱き潰すようにして、彼は規格外の超  
乳を味わって……。

「……ま、マスター……あ……  ……、外っ……  お  
外……ですよ……!？」

何度も乳肉に指が食い込んでいくうちに、きよとんと  
していたパッションリップの表情は、だんだん爆乳を好  
き放題にされるうちに快楽に蕩けはじめた。

まだあどけなさを残した童顔が、熱を帯びた雌の顔に

変わっていく……。

「……リップ……ごめん……っ……。でも……、いいよ  
ね……?」

耳に触れる彼の吐息は荒く、獣欲に沈んでいく瞳は、  
背中越しに豊かな胸の谷間をじっと見つめて……。

ズボン越しにも分かるくらいに膨れ上がった雄竿をぐ  
りぐりと押し付けられると、リップも全てを受け入れて  
しまつて……。

快楽を期待して つん……  と勃起するさくらんぼ  
乳首が、鏡に映った。

「っ……  ……は、はい……っ……  」

……こくん、と頷くだけで、衣擦れがリップに甘い吐  
息を漏らさせる。

……いつしかリップの持つスキルが二人の気配を雑踏  
から完全に消して、繁華街の裏側、ビルの隙間へと隠し  
ていく。

そうなつてしまえば、もう誰にも止められなかった――

！。

◇

——ダクトが絶え間なく音を立てる薄暗い一角にようやく身を落ち着けると、リップは一時的に腕の圧縮を解いて、その金色の手甲にゆっくり腰を下ろす。

「ここなら……❤ 大丈夫そうです……❤ ほんとに……❤ 特別ですからね……❤」

辺りを見回すリップの頬は紅潮しきって、羞恥に隠れた期待を隠しきれない。

勃起して戻らない乳首がぼつちりとブラウスに浮くのが、何よりの証。

せつかくのムードに水を差されながらも、一度その大きな爆乳に触れられてしまうと、彼女もまたその気になつてしまつていた。

「——じゃ、じゃあ……❤ いつもみたいに……❤ どうぞ……❤ マスター……❤」

そんな160cmのノーブラ超乳を ザしつ……❤ と差し出す。

……自分の手では満足にボタンに触れることすらできないのだから。

これほど豊満で蠱惑的なのに、自分では永久に愛欲を満たせない倒錯的な身体を、想い人の手に委ねて……。

「……ごめん……、結局今日も我慢出来なくて……」

口では謝りながらも、マスターの手は既に本能に急かされるまま、リップの爆乳をさわさわと弄りだしてしまふ。

文字通り手に余るほどの丸みを撫でまわして堪能すると、乳汗に濡れたブラウスの布地にとりと柔肌が透けた。

「……それじゃあ、外すよ……」

……リボンに隠れた首元の第一ボタンから順番に、ぶちっ、ぷちっ とブラウスのボタンが外されていく。

そのたびに、苦しうに張り詰めていた布地が ぱっん❤ ぱっん❤ と弾けるように開いていって、その下

の柔肌を覗かせる。

北半球に完全に乗り上げた第二ボタンに手が触れると、  
それだけで たぶっ♡ たぶっ♡ と爆乳が弾んだ。

「……ひう……っ♡ マスター……あ……♡ 優しく……  
っ♡♡ 優しくお願いします……っ……♡♡ 服、擦れて  
え……♡♡」

ブラウスの布地の繊維、その一つ一つが、敏感な肌をし  
つとりと擦り上げる。

……そんな微かな刺激さえも、リップの身体は感じられ  
てしまう。

その上で、大好きな相手の指が触れるのだから、蕩け声  
を堪えることが出来なくなってしまうのも無理はなかつ  
た。

ゆっくりと服を脱がされる秘め事のような感覚に、大  
きな大きな乳房の下で、心臓の鼓動が速まっ……

「……ご、ごめん、いつもと違うから……」

「あっ……♡♡ でも……っ♡♡ ゆっくり……しすぎない  
てください……♡♡ ……それはそれで……っ♡♡ もどか  
しい、です……♡♡」

「ほんとだ……すっごい……♡♡ 触ってるだけなのに……  
……♡♡ 服越しにもおっぱいがしつとりしてるの分かる……  
……♡♡ ノーブラのリップ……♡♡ すっごくエロい……♡♡」  
「や、やあ……♡♡ やめてくださいあい……♡♡ 言わない  
でえ……♡♡」

普段とは違う姿に、これまで芽生えたこともなかった  
羞恥心が目覚めて。

そして、快楽に変わっていく。

……爆乳の曲線の頂点で今にもはち切れそうな第3ボ  
タン、下乳の影に隠れてしつとりと汗に濡れた第4ボタ  
ンが外されると、むわあ……♡♡ と蒸れたお腹や腰が覗  
いて。

そうしてブラウスの前が大きく開かれると、溜まりに  
溜まったフェロモンを漂わせながら、4Zカップのロリ  
超乳が どゅんっ……♡♡ とまろび出る。

「きやう……♡♡ ……んう……♡♡」

それと同時に勃起した乳首が ぴんっ……♡♡ と引つ  
掛かって擦られると、一際強い嬌声がリップの唇から漏  
れ出した。



「……………♡ おお……………♡」

はだけた胸が外気に触れるだけでも、ぶるっ……………♡  
と快楽に背筋が震えて、そのままたゆたゆと乳房が揺れる。

その光景を目の当たりにするだけで、激しい興奮がマスターに感嘆の声を上げさせてしまうほど。

「……………ひゃあ……………♡ あう……………♡ マスター……………あ……………♡  
いきなり……………♡ ダメですよお……………♡ くすぐったい……………♡」

気づけば、自分の顔よりも遥かに巨大な乳肉をぎゅつと抱いて、フェロモンに誘われるまま顔を埋めてしまっていた。

重さでびったりと閉じたIの字の谷間に鼻先を埋めて、すんすんと匂いを嗅ぐたびに、敏感な乳肌彼の息遣いが触れる。

……………リップの切なそうな声が漏れ出すと、それが更に彼の昂ぶりを激しくしていく。

「う、ごめん……………♡ ほんとに我慢できなくて……………♡」

……………名残惜しそうに超乳クツションから顔を離すと、たふたと揺れる姿が視界いっぱいになる。

……………ノーブラのはずの160cmおっぱいは重力に負けて垂れ下がることなく、乳の北半球をほとんど水平にするほどのハリで支えられている。

まさに女神の身体、女神の乳房。

そんな爆乳を恥ずかしそうに、けれど、どこか自慢げに曝け出して、パッションリップもまた、興奮と快感に蕩けていく。

自分もまた、マスターの獣欲にあてられるようにして……………。

「……………そ、それじゃあ……………♡ 私も出してあげますね……………♡」

……………リップはゆっくりと股座に顔を近づけると、ズボン越しにすら感じられる雄臭さを嗅いで、うっとり頬を染める。

「……マスターの……♡ おちんちん……♡ おちんぼ  
……♡」

……ズボンのジッパーの金具を軽く啜えて、ゆっくりと下ろす。

そんな倒錯的な仕事でしつかりとご奉仕する間にも、リップの鼻先や頬にはどくどくと脈打つ勃起の激しさや熱さが伝わって、彼女を昂らせていく。

隠しきれない膨らみが、彼女の童顔にべったりと張り付いているのだから。

雌の熱情に迷える艶やかな唇が、ゆっくりとパンツに開けられた穴をこじ開けて……。

「……わたしに……♡ くださあ……い……♡」

蕩けた声で雄そのものに求愛し、ちゅっ……♡ ちゅっ……♡ と音を立てながら、竿肌を食んでみせる。

そうすると、漏れ出したリップの涎がマスターの下着をしっとり湿らせた。

「んっ……♡ んう……♡ ……熱い……♡」

何度もキスを交わしながら、少しずつ引つ張り出して……。

ぶるんっ、と跳ねるように飛び出す男根が、リップの柔らかな頬を軽く叩いた。

「……今日も……♡ とつても硬いですね……♡」

頬ずりしながらうつとりと目を伏せると、びくんっ♡ びくんっ♡ と跳ねて悦びを隠せないペニスに、しつとりとリップの舌が触れて。

「んちゅ……♡ んう……♡ れるう……♡」

唇に皮を剥き上げられ、とろとろと我慢汁を垂らす亀頭をねつとりと舐ると、つう……♡ と涎が細い橋を架ける。

そうすると、ただでさえ激しい昂ぶりはよりエスカレートして……。

「……リップ……っ♡ そろそろいい……?」

「……いつでもどうぞ……♡ 挿乳れて……♡ くださ  
い……♡」

リップが二の腕で超乳を挟みこむと、歪なハートを形  
づくりながら むにゅ♥ むにゅ♥と寄せ上げられてい  
く。

「……いくよリップ……♡ パイズリ……させて……♡」

……ついに理性が決壊して、マスターはその言葉を口  
にしてしまう。

パイズリ。

パッションリップの乳房を一目見るだけで抱く欲望は、  
一度味わってしまうと、抑えることなど出来ないのだけ  
ら……。

初めて経験した時も、気づけばリップの身体を押し倒  
して、巨大なバストに馬乗りになって犯していた。

……何度味わっても満たされることのない、爆乳への  
征服欲。

4 Zカップの豊満すぎる胸で射精するたび、逆に虜に  
なつて。

ついにこうして、野外ですら乳交を求めてしまうほど  
になつて……。

「……ほ、ほんとに……♥ いつもより……♥ 硬いで

す……う……♥」

突きだされたバストに真正面からペニスを突き入れる  
と、リップ自身の胸板よりも分厚い乳肉が ずぶぶ……  
っ……♥ と亀頭に搔き分けられて。

竿の倍以上もある4 Zカップの谷間では、半ばほどに  
も届かない。

けれど、自重でみっちり閉じていく重たい爆乳は、  
充分すぎるほどの圧迫感で竿を刺激していく。

温かく柔らかな、けれどしっかりと重たい、巨大なお  
っぱいの感触。

胸元の付け根から、臍下まで届く下乳まで、みっちり  
と雌肉が詰まつて……。

ただ挿入し、挟まれているだけなのに、「圧」の快感が、  
竿から頭にじわじわと広がつて。

「上半身ほとんどおっぱいなのに……っ♡ ノーブラで  
たぶたぶ揺らして……っ♡ 我慢できるわけないだろ……  
っ……♡ ズルいよリップ……♡」

「ひ……うう……♥ わ、わたしだって……♥ 気にし  
たこと、なかつたもん……♥」

ひとたび抽送が始まると、リップの乳肉が激しく揺れる感触を味わって。

「……リップのおっぱい……っ♡ このでっかい爆乳が……っ♡ 誘ってくるから……っ♡……っ♡」

「ひああ……♡ やあ……♡ ご……ごめんなさい……っ♡ おっぱいおつきくてごめんなさい……っ♡……っ♡」

谷間にペニスを突き入れたままわしと揉みしだき、乳首を乳輪ごと振り上げる。

「……っ♡ マスターはズルいですっ♡……っ♡」

リップが自ら胸を寄せると揉みしだく手に、ぐりぐりと乳肉が押し付けられて。

分厚い爆乳の下から、すっかり激しくなった鼓動が伝わってくる。

「……私だって……♡ 我慢してたのに……♡ こんなことされたら……♡ あんな触り方されたらあ……♡……♡」

「……いつもみたいにしたいですから……♡ マスターの硬いおちんちんで……♡ 気持ちよくしてください

……っ♡

ペニスに媚びるリップの声に応えるように抽送が激しくなると、むにゅむにゅと柔らかく弾む乳肉を腰で突き上げる。

それでもしないと、超乳に股間が埋もれてしまうのだから……っ♡

「……っ♡ ひう♡ あう……♡ あうん……♡ きやう……♡」

……興奮に従うままの激しい抽送が たばんっ♡ たばんっ♡ とが重たい肉音を鳴らすたび、リップの濡れた唇から嬌声が漏れ出して、ビルの隙間に響き渡る。

被虐体質のせいでもんもんエスカレートする獣のような腰振り、そのたびに、ぐりゅ……♡ ぐりゅ……♡ と30kgオーバーの乳肉、極上の乳圧が、勃起ペニスをすり潰して、圧をかけて……っ♡

「リップ……♡ 腰……っ♡ とまんない……っ♡」

「……だめえ……♡ お外なのに……♡ おっぱい……♡ 気持ちよすぎて……♡ え 声っ……♡ でちやい

ます……♡  
」

底の見えない爆乳がペニスを受け入れるたびに、谷間の内の乳肌はごりゅごりゅと抉られて、形を無理やりに変えられていく。

敏感すぎるリップの身体の中でも、セックスアピールとして開発されきつた爆乳はもはや一つの性感帯にまで育ってしまった。

パイズリで谷間に抽送を繰り返されるのは、リップにとつては臆をずつぷりと犯されているのと何ら変わらな

い。  
「……ひゃ……あ……♡ ひゃう……んっ……♡」

龟头を膨らませた雄竿が乳肌を擦るたびに、童顔が快楽に染まり、幼くも艶めかしい背徳感たつぷりの声がかかる。

膣壁の一つ一つを擦られる以上に強い快楽が、谷間だけで30cm以上もある長く太い爆乳をぞくぞくと震わせる。

敏感すぎる肉体は、色白な肌にうっすらと透ける血管

や、爆乳の中でばんばんに肥大した乳腺までも敏感すぎる秘所にしてしまつて……。

……気配を遮断しきつて誰も来ないと分かっている、その背徳感とスリルが4Zカップのロリ超乳を快楽で蕩けさせてしまう。

「……もつとお……♡ もつと触つて……♡ おちんちんで……♡ 硬いおちんぽで……♡ わたしのおつきな胸……♡ 触ってください……♡ 触つてえ……♡」

……普段なら肌に触れられることさえ拒むのに、こうして一度浸つてしまうと、リップは食欲にペニスを求め出す。

無自覚に、イジメてほしいと懇願してみせて……。

どれだけ倒錯的に見えても、リップにとつて、パイズリは最高の愛情表現なのだから。

自分の胸が、愛されていると分かるから。

今の自分は怪物ではないと分かるから。

自分の大きな胸が、大好きな相手を幸せに出来るから分かるから……。



だから、どんなに激しく谷間を犯されても、リップは乳房を差し出すことをやめようとしなさい。

むしろ、もつととして欲しい、と切なそうに自ら乳肉をや乳首を擦りつけて、触れることの叶わない身体で、少しでも相手を愛でようとする。

胸を突き出し、自らバストを寄せ上げてみせて……。身体の中で一番発育のいい部分をたっぷり愛でられるとキス以上に気持ちよくて、まだ幼さの残る頭の中まで、どろどろになってしまっていた。

「マスター………もつと………もつとお………」

……重たい乳房をホールドしていた腕も快楽で脱力してしまうと、無防備になった160cmのバストが抽送でたぼっ♡ たぼっ♡ と激しく波打った。

……それでも、谷間はペニスをみっちりと啜えこんで離さない。

両方あわせて30kgを超える乳重で挟んでしまうと、しつとりと滑る乳汗ともちもちの柔肌で包みこんでしまうのだから。

巨房に挟まれて逃げ場のないペニスが興奮で上下に跳ねるだけでも、分厚い乳肉が敏感な亀頭の淵をぞわぞわ

となぞって。

もつと、もつとと甘く懇願されながら、いつまでも続く破滅的な快楽。

煽られるままに、マスターはより深く腰を突き入れてしまう。

竿の付け根と乳肉の縁が、びったりと密着するほどに……。

たばんっ♡ たばんっ♡ と雌肉を弾ませていた大振りの抽送が、へこへここと雌穴を堪能する腰遣いに変わっていく。

深く、少しでも深く。落ちてしまうその寸前まで、深く……。

竿の全てを埋めようと、乳奥に種を注ごうとして、必死になって……。

「気持ちいいっ………♡ リップのデカバイ………♡ 160cmっ………♡ 気持ちいいよお………♡」

「……で、でも………♡ あんまり………♡ 夢中になっちゃダメですよ………♡ 今日………♡ 落ちちゃったら戻せないんですよ………？」

「……分かってる………♡ 分かってるけど………♡ こんなの………♡ 止められない………♡」

パッションリップの深い深い谷間の最奥。

……文字通りの、破滅的なプレストバレー。

……滑り落ち、吸いこまれて戻れなくギリギリのラインというスリルさえも快楽に変わって、より腰振りを激しくさせてしまう。

もつとこの爆乳を感じたい、犯したい。

この巨大な乳房をイジメてみたい。

目の前で喘ぐリップに、より激しい恥辱を与えてみたい。

彼女がパイズリで猥らに善がるほどに、マスターの中では病みつきになるような嗜虐の快楽が生まれて……。

「……ひあ……♥ ああ……♥ あうう……ん……っ……♥ 激しすぎますう……っ♥」

フェロモンたっぷりの乳汗と我慢汁が交じり合って、乳肉の隙間からはぐちゅぐちゅと音が聞こえだす。

ペニスと爆乳が互いの体温で溶け合って、一つになっ  
ていくようで……。

ずぶずぶと肌を重ね絡みあう身体は、セックスと何ら  
変わらない。

むしろ、それ以上に背徳的に見えて……。

「……ほんとにつ……♥ マスターはパイズリ大好きですよね……♥ こんなところでも……♥ 我慢できないなんて……♥」

「……ご、ごめん……っ……♥ 普段と違うリップのおっぱい見てたら……♥ 我慢できなくて……♥」

「……いいですよ……♥ 思う存分パイズリ味わってください……♥ ノーブライズリでいっぱい感じてください……♥ わたしも……♥ 気持ちいいので……っ……♥」

「リップ……っ♥ リップ……っ♥ うう……っ♥」

何度も名前を呼び、抽送を繰り返し、マスターはもう腰を動かすことさえ出来なくなつて。

絶頂寸前の射精感に身を震わせると、亀頭がばんばんに膨らんでいく。

「……射精するんですね……♥ 出ちゃうんですね……♥ いっぱい出していいですよ……♥」

そんなペニスを乳肉が完全に捕まえると、ねっとり



絡みついて逃がさない。

一滴残らず谷間の中で射精させようと、更に圧が強まって……。

「……見て……♡ 見てくださいマスター……♡ わたしだけを見て……♡ わたしのこと見ながら……♡ わたしのおっぱいに夢中になりながら……♡ イって……♡」

決壊寸前のペニスは、びくん♡ と震えて我慢汁を垂らす。

……リップは止めを刺すように、唇を濡らしたまま囁く。

リップの顔、吸い込まれそうな桜色の瞳を見つめようとしても、たゆたゆと揺れるロリ超乳が常に視界をちらついで……。

「ぎゅっ♡ つてしてあげますから……♡ 射精、してください……♡」

リップの両腕が乳肉の付け根を締め上げると、乳圧が最高潮に強まって。

「……つくう……♡ あ……♡ つ♡ う……♡ つ……♡♡♡」

……股間の奥底をばんばんに膨らませ、尿道を内側から押し広げるような射精が始まっていく。

どく♡ どく♡ びちゅ♡ びちゅ♡ と、亀頭を乳肌に密着させたまま迸って。

30 cm以上の長く深い谷間で押しつぶされると、出たての精液は乳肌の上で、ぶしゃっ♡ と弾けた。

「ああ……♡ ひああ……♡ 出ます……♡ つ♡ 精子……♡ マスターの精子……♡ でてるう……♡」

……スイカ並みの巨房を汗と子種でどろどろにして、リップもまた乳肌だけで絶頂に昇ってしまう。

幼い身体には過剰すぎるほどの、痺れるようなオーガズムに浸って……。

「……あ……♡ う……♡ きゃ……♡ ひうう……♡ き、今日も……♡ こんなに……♡ つ♡ ありがとうございませ……♡ う……♡」



……ただでさえ絶頂で蕩けきった幼い声は、爆乳の中でうじゃうじゃと蠢く子種の群れまで感じ取るせいで、更に震えてしまう。

ただでさえ雌のサーヴァントを震わせてしまう、愛情たっぷり吐き出された魔力の塊。

リップの敏感すぎる乳肌は、谷間や乳肌べったりと吐き出された精子の一粒ずつまで、しっかりと分かってしまつて……。

「……すご……い……ねばねばして……ゼリーみたい……とつても濃い……お外でパイズリ……そんなに興奮しちゃいましたか……？」

たゆっ♡ たゆっ♡ 両胸ごと身体を揺らすと、ほとんど固形になったゼリー状の濃厚な子種が分厚い乳肉を滴り落ちて……。

そして、その底の見えない深淵へと、一滴残らず消えていく……。

「……んっ……入ってきてる……う……私のおっぱいの中……ブレストバレーの中まで……マスターの精子でどろどろ……今日もぜんぶ……」

大切にしまつてあげます……♡

吐き出されたマスターの精液は、ブラックホールにも似たブレストバレーの虚数空間にどろどろと零れ落ちて、そして無限に溜まり続ける。

……リップと出会つてから、この底なしの谷間へ、どれほどの精子を吐き出したのか数えきれない。それほどに、彼のペニスはリップのパイズリに病みつきになつてしまつていた。

「……今日もいっぱい出してくれて……ありがとう……ございました……」

……それは4Zカップの超乳を愛した証であり、愛された証。

永遠にその内側は満たされないと分かつて、リップはその心地よさを求めてしまつて。

「……んっ……んう……ま、マスター……すつきりしましたか……」

にゆるん……♡ と谷間からペニス引き抜かれる最



「……それじゃあ……♡ たくさんお願いしようかな……♡」

……まだ出し足りない、とても言うように、ブラウスのボタンの隙間から ずぶぶ……♡ と指が突き入れられる。

……挿乳の快楽を鮮明に思い出すと、リップの背筋が震えてしまつて……。

「っ……♡ ひああ……♡ ……もう……♡ マスターは優しいのに……♡ こういう時だけ変態さんです……♡」

もじもじと恥じらうリップは袖で大きな胸を隠そうとして、隠しきれない。

「……いつでも……♡ って言ったけど……♡ やっぱりお預けです……♡ 私のおっぱい……♡ ブラジャー買う前から……マスターにどろどろにされちゃうもん……♡」

「……ごめんごめん……。今日は……それがメインだもんね……」

……ブラジャーを買ってあげてください。

性徴期を迎えた胸の大きな女の子にとっての、通過儀礼のような言葉。

パッションリップの場合もそれは同じこと。手を差し伸べられて。

本当の恋を知つて。愛されようとして。

……幼いままだった迷宮の怪物は、ようやく少しだけ大人になつて。一人の少女になる。

……その誰よりも大きな胸を、着飾つて……。

「……はい……♡ わたし……♡ 楽しみにしてましたから……♡」

ブラウスの下で文字通り胸を弾ませると、160cmのロリ超乳は たゆん……♡ と一際大きく揺れてみせた。



2 パッションリップ はじめてのブラジャー

——遡ること、一週間前。

「——ねえマスターさん、暇ならリップとデートでもしてあげたらどうなんですかあ？」

……事の始まりは、マイルームにやってきたB Bの唐突な提案だった。

「……今年も自分だけ可愛い水着が貰えなかったからって、まだちよつと拗ねてるよとこありますし……。少しくらい我が儘聞いてあげてもいいんじゃないやありません？」

「……急にそんなこと言われても……。いきなりデートなんて……」

……狼狽えるマスターを眺めて、彼女は呆れたようにため息をつく。

「……デート以上にすっごいこと毎日每晚しておいて、今更すぎませんか？ 前に興奮しすぎてブレストバレーに落ちちゃった変態さんを助けてあげたの……誰でしたっ

けく？」

「……そ、その話は……っ……」

……被虐体質に煽られ、我慢しきれずリップの胸を「使った」ある時。

加減を間違えて、マスターは虚数空間に滑り落ちてしまった。

……そうして、B Bだけには関係を秘密に出来なくなつてしまつて。

「はい、そうですね。マスターさんは私にもあの子にもすっかり借りを返さないといけませんよね？ それに……」

……冗談めかした口調ながらも、視線はマスターをじつ……、と見つめてくる。

B Bの瞳の紫色が、より色濃くなつて。

「……あなたがしっかりリップに接してあげないとダメなんですすよ？ そのところ、分かってます？ マスターさん？」

「……小悪魔A Iに半ば脅すように頼まれては、もう選  
択肢などありはしなかった。」

「でも……、プランとかないし……、何処で何すれば……」

「……B Bちゃんが可愛い娘のために準備してたものが出来たのでえ……、センパイにはおつかいに行つて貰おうと思つてましてえ……。お願いできますか？ できますよねえ……？」

そうして、B Bの艶やかな唇が一つの言葉を告げる。

「……あの子にブラジャー買ってあげてください」

「……ぶ、ブラつてその……。下着買ってこいってこと……？」

「……マスターは自分自身の言葉で一気に妄想が膨らむと、その顔は真っ赤になつて……。」

「……ええ、そうですけど何か？ あの子、まだまだ中身は子供ですから……。形から入つて大人になつてもらおうかなうつて思ひまして」

「……そ、それにさ……。リップのサイズでブラジャーとか、用意できるの……？」

160cm、4Zカップの特大バスト。

それを覆い、支えるための下着。

いくらマスターが思春期の少年と言えど、想像できる範囲を完全に超えてしまつて……。

「私なら出来るんですよ……。特別に作つてあげたんです。男の子のセンパイはわかんないと思ひますけどお、女の子にとっては、とっても大事なことですからね……？」

くいつ、と軽く胸を張ると、わざとらしく豊満なバストのラインを見せつけて、悪戯っぽく微笑んで。

「ふふ……っ……。私なんかに見惚れてちゃダメですよ……。改めて言つときますけど……。ちゃんとリップに手を差し伸べてあげなさいけないんですからね？ あの子のマスターは、あなたしかいないんですから」

……手袋を着けた白い指で刺してみせると、そう念押

しする。

「……B Bちゃんはこう見えてもラスボス兼隠しヒロインですからあく、いつだって大事な先輩に攻略して貰えますけどお……。あの子、残念ながらそうじゃないので……」

……最後まで飄々と、嵐のようにマスターをひっかきまわして、B Bは去っていく。

「……ちよつとした準備くらいはしてあげますから、頑張ってくださいね♡ リップのマスターさん♡」

——そうして二人は今日を迎えて、日本でも有数の繁華街に降り立っていた。

「——準備って……。作った、って……。そういうことなのか……!？」

——ランジェリーショップ『サクラメント』。

繁華街の一角を無理やり上書きしたような佇まいの店

舗が目の前に現れると、マスターは思わず面食らってしまう。

「……ここで合ってるんですか……?」

「……うん、場所も名前もぜんぶ指定通りなだけで……、まさか、ここまでとは……」

そして、導かれるままに店内に一步足を踏み入れると、二人はその淫靡な雰囲気息を呑んでしまっていた

「——なんだ……これ……♡」

……その声音は、本能的な興奮を隠しきれない。

露骨すぎるほどの名前通りに桜色と黒を基調にしたその内装は、かつてどこかの世界にあつた迷宮に似て。

……B Bの凝り性がまた出たのだと、見るだけで分かっってしまう。

並べられたマネキンはB B自身の姿を模り、そのメリハリのある豊満なボディラインを自慢するように、色とりどりの下着で飾っている。

リップのためとはいえながらも、彼女はマスターをかからかうようにして、自分の身体をアピールするのも忘れ



てはいなくて……。

……BBの言葉を、彼女のこと自体を思い出してしま  
うのも、無理はない。

むしろ最初からこうなることを計算に入れて、BBが  
自分たちをからかっているかのようで……。

店内をじんわりと満たす香りは、彼女やアルターエゴ  
たちから漂ってくる、春の花蜜を煮詰めたような甘い雌  
臭によく似ていた。

如何わしさすら覚えるほどに雌と女体をアピールした  
空間は、いつか訪れた深海電脳楽土をマスターに想起さ  
せてしまう。

秘密の花園に立ち入っていけないことをしている感覚、  
乙女の秘所に触れるような感覚。

まるで初めて18禁のポルノを見て、異性の肉体を意  
識したような、そんな罪悪感交じりのいけない興奮さえ  
覚えてしまつて……。

オスの本能にダイレクトに訴えかけるような情報の波  
のせいで、トリップにも似た興奮に惚けてしまひそうに  
なる。

……プライベートゾーンを隠しながらも、バストやヒ  
ップをより艶めかしく彩ってみせる下着たちを見ている

うちに、彼は甘く勃起してしまつていたのだから……。

「……マスター。どこ見てるんですか……？」

「……！！？」

……すぐ傍でトリップが囁くと、どくん……と一際強く  
心拍数が跳ね上がる。

……その声音は、まるで浮気でも咎めているようで……。

「……あんなつまらないもの……見なくてもいいのに……  
❤️」

「んむ……っ……！！？」

声音はともかく、続く仕草はお気に入りのぬいぐるみ  
を取りあげられそうな子供のよう。

あげません、わたしの物です、とトリップの腕が強引に  
マスターを抱き寄せる。

そうすると、彼の頭は視界いっぱい広がる160cm  
のロリ超乳クッションに埋もれてしまつて……。

……そんな反応も、BBの思う壺なのかもしれない。  
……けれどそれを分かった上で、トリップは独占欲を爆

発させてしまっていた。

「……………ここに……………もつと大きなおっぱい、あるんですから……………」

圧縮されてなお力強い腕で、むぎゅ……………むぎゅ……………すり……………すり……………とハグをすると、30kgを超える乳肉のポリウムが丸ごと顔に擦りつけられる。

「どうですか……………これならもう……………わたししか見えませんか……………」

……………リップのおっぱいそのものに求愛され、乳肉に溺れそうになりながら、マスターは彼女の囁く声に蕩けそうになる。

興奮と愛欲に浸って、さくらんぼサイズの乳首がはつきりと膨らんでいる感触まで味わわされて……………。

「ぶは……………っ……………」

「ほら……………ちゃんと見てください……………」

……………やつとハグから解放されたマスターが顔を上げると、彼女は自信たっぷりに大きな胸を張ってみせる。

「……………今日は……………わたしのおっぱいがどれだけ大きいのか……………改めてマスターに教えてあげます……………胸囲イコール支配力……………なんですから……………負けません……………」

かつてない盛り上がりを見せるリップ。  
その桜色の瞳には、絶対的な自信と、名前の通りの情熱的な炎が燃えていた。



「……………ほら、ありましたよ……………。わたしのサイズのブラジャー……………」

改めて店の奥へと進むと、リップの規格外のバストをそのまま再現したマネキンが現れる。

「……………うわ……………でつか……………」

自立できるギリギリまで育ったアンバランスな乳房は、身長の低さも相まって、よりボリューミーに　どゆん：…っ…っ…♥と突き出して、巨房が作り出す影で、マネキンの下腹部や腿はほとんど見えない。

マスターは思わず、感嘆と興奮が入り混じった声を漏らしてしまっていた。

「……は、恥ずかしいから言わないでください…っ…♥…っ…わ、私の胸…っ…♥　ちゃんとそういう感じで見られるのは…っ…♥　嬉しい、ですけど…っ…♥」

あれだけ自分からアピールしてみせても、マスターに改めて言葉にされると、リップは恥ずかしがって顔を真っ赤にしてしまう。

「……ほんと凄いな…っ…、リップの胸、ここまでしないと収まらないんだ…っ…」

そんな胸を必死に支えるブラジャーを一目見るだけでも、その大きさが分かる。

つい先ほど、リップが着けることさえ出来ずに千切れてしまったBBのそれとは、比べ物にならないのだから。

……文字通りの、規格外サイズ。

両手で広げればカップの部分だけで顔どころか頭よりも大きく、それが店内に沢山並ぶと、巨大な貝殻の標本のように…っ…。

頭の中でその一つ一つにリップの乳房を重ねると、興奮を抑えきれず、マスターは声を震わせてしまう。

「……すごい、すごいよリップ…っ…。これ、スイカくらいなら余裕で収まるかも…っ…」

巨大な果実の皮を剥くようにして、マネキンからブラジャーが外されていくと、マスターは普段触れることさええない裏地までしつかりと撫でて、なぞって。

本能に急かされるまま、巨大なブラジャーの感触を堪能してしまう。

「私のおっぱいはスイカじゃありません…っ…っ…っ…あ、ああ…っ…♥　裏まで触らないでえ…っ…♥　ひ、広げちゃダメ…っ…♥」

あれだけ自信たっぷりにアピールして見せても、いざ本番を目の前にすると、リップは顔を真っ赤にして恥じ

らってしまっていた。

まるで自分の胸を触られているような、そんなぞわぞわとした錯覚さえ覚えているようで……。

「で、でも……これで……分かりましたよね……」

けれど、目の前の想い人が、たくさんの風船が浮かぶようにして立ち並ぶ自分の超乳に夢中になる姿は、リップの心の奥に優越感を湧き上がらせる。

「だって……わたしのほうが大きい……わたしのほうが……強いんですから……」

ふつふつと生まれてくる言葉に、彼女はうっとりとした瞳を蕩けさせる。

自分自身の声に、胸の色香に、陶醉するようにして。

「……160cm……4Zカップ……わたしが一番です……」

リップは自慢げに自分のバストサイズを囁くと、むにゆう……と両腕で乳房を寄せ上げる。

ブラウスの下でハート型に形を変えていくノーブラ乳肉で、自らの色香をアピールしてみせて。

「……わたしだけ……わたしだけを見てください……おっぱいも……それ以外も……マスターのこと……独り占めさせてください……その代わり……わたしのおっぱいも……あなたのものにしていいから……」

……寄せ上げた胸を、今度はぐつ、と突き出して、差し出してみせて。

「ふわぁ……!?!」

そのまま勢い余って倒れそうになるリップの身体は、しっかりとマスターに抱き止められていた。

「っ……♡ おもっ……♡」

ずっしりと改めてその大きさを味わわれる。けれどそれをしっかりと受け入れて、受け止めて、今がある。

マスターはその身にずっしりと感じるその乳重で、改めて思い知らされて。

「……も、もう……♡　そこはあ……♡　おっきいって言うてください……♡」

……誰もいないのをいいことに、リップは腕を絡めて抱き着いていく。

そうすると、二人の身体の間でロリ超乳はクッションのようにむにゅむにゅと潰れて……。

「……ごめんなさい……♡　やっぱりまだ……、慣れてないみたいです……♡」

「だからブラジャーでしっかり支えないとね……。この大きな胸……」

「……は、はいっ……♡」  
「それじゃあ、ちゃんと選ぼうか……」

頬を染めるリップの手を引いて、二人はまた店内を歩きはじめる。

「……あの……♡　えっと……♡　マスターはどれが似

合うと思いますか……？　わたし……、自分で服選ぶのなんか、初めてで……」

……リップは並んだ下着を一つ一つ眺めながら、少し不安げに問いかけて。

「初めてなのに僕が選んでいいの……？　リップの好みとかは……」

「いいんです……♡　マスターに……♡　選んでほしいんです……♡」

「……これ、良さそうだと思うって……」

大きなカップの表面では、可愛らしい濃淡二つのピンクがストライプ模様を描いて。

けれど、縁にはセクシーな紫のレースがあしらわれて、大人びた色香を引き立ててみせている。

「……少し着けてみても……♡　いいですか……♡」

……マスターに広げてもらったそれを、リップは胸へと軽くあてがう。

やきもちでもアピールでもなく、大人の階段を上る恥じらいを包み隠すようにして。

「……はう……♡」

規格外の超乳がすっぱりと二つのカップに収まると、自分の胸が包まれていくはじめての感触に、リップは思わず声を上げそうになる。

最初は2本の紐で隠すだけだった、160cmのバスト。ブレスト・バレーの象徴でしかなかったそれは、たっぷりと愛でられて「おっぱい」になって。今ではこうして、大きくも可憐な下着で飾られるまでに変わっていた。

……また一步、パッションリップは少女になっていく……。

「……うん、ちゃんとサイズも合いそうだね……よかった……」

子供と大人の甘い色香を併せ持つ彼女の体型には、そのデザインがとても似合っただけで済んだ。

「……ありがとうございます……♡ それじゃあ、これにしますね……♡」

リップがブラジャーを大事そうに抱えると、マスターの目には二つのカップが花束のように映って。ほんの少し、BBが言っていたことも分かるような気がしてしまふ。

「でも一応、ちゃんと試着してみる……?」

「はい……♡ マスターも、一緒に来てくれますよね……♡」

慣れない仕草でマスターに腕を絡めながら、もじもじと恥ずかしそうに表情を伺う。

くいくいと、軽く身体ごと引っ張って……。

「……わたし一人じゃ……♡ つけられないんですから——♡」

……何度も肌で触れあってもこうして恥じらう姿は、年頃の少女と何ら変わらないように思えた——。

